

# 白氏文集 二十六 天可度 平成三十年四月

加藤 淳平

漢土の歴史に榮耀を誇りたる唐の盛期、太宗より則天武后を経て玄宗まで百年有餘續ぎ、歴史上「初唐」、「盛唐」と呼ばれるも、それは玄宗末期の戦亂とともに終る。戦亂短く終熄せる後、「中唐」、則ち白樂天の時代となれり。則天武后時代に登用せられ、樂天もその一人なる科擧官僚等、傾ける國勢を建直し、秩序を維持せんと努め、腐敗せる宦官、李姓の閥族等と抗争す。直接名を擧げざるも此の詩に諷諭するは、樂天が父の世代の閥族政治家、「巧言簧の如し」と評せられたる李吉甫にして、白樂天四十年代前半の折の宰相なり。

天可度 惡詐人也 天度<sup>はか</sup>る可し 詐りある人を惡<sup>にく</sup>む也

天可度 地可量 天度<sup>はか</sup>る可く 地も量る可し

唯有人心不可防 唯人心のみ 防ぐ可からざる有り

但見丹誠赤如血 但見る 丹誠赤きこと血の如きのみなれど

誰知僞言巧似簧 誰か知らん 僞言巧みなること簧に似たるを

勸君掩鼻君莫掩 君に鼻を掩ふを勸むるも 君掩ふ莫かれ

使君夫婦爲參商 君が夫婦をして 參と商<sup>た</sup>爲らしめん

勸君又蜂君莫又 君に蜂を又<sup>と</sup>るを勸むるも 君又る莫かれ

使君父子爲豺狼 君が父子をして 豺と狼爲らしめん

海底魚兮天上鳥 海底の魚 天上の鳥

高可射兮深可釣 高くも射る可く 深くも釣る可し

唯有人心相對時 唯人心のみ 相對する時

咫尺之間不能料 咫尺の間も 料<sup>はか</sup>る能はざる有り

君不見李義府之輩笑欣欣 君見ずや 李義府之輩 笑ふこと欣欣なるも

笑中有刀潛殺人 笑中に刀有りて 潜かに人を殺す

陰陽神%變皆可測 陰陽 神變 皆測る可し

不測人間笑是瞋 測られざるは人間 笑ひ是れ瞋<sup>いか</sup>りなるを

(大意) 天のことも地のことも推測できるが、唯人の心のもたらす難事だけは防げないことがある。

一見したところでは赤誠血の如く見えるが、僞りの言葉を竹笛の中の舌細工のように巧みに操る者が居ることを誰が知らうか。韓非子にある後宮の女のやうに、主君の前で鼻を隠せと勧められてもそれに従つてはならない。従へば君の夫婦は夜空のオリオン座とさそり座のやうに引離されてしまふだらう。別の故事の息子のやうに、若い繼母の襟にたかつた蜂を取るやう頼まれても蜂を取つてはならない。取れば君たち父子は豺<sup>やまいぬ</sup>と狼<sup>おほかみ</sup>のやうに憎み合ふだらう。海底の魚でも天上の鳥でも、高いところを飛ぶものは射落とすことができ、深い海底を泳ぐものは釣上げることができる。ただ人の心だけは、八寸や一尺の近くに居ても分からないことがある。君は見ただらう。かの初唐の時代の李義府のやうな人は、にこにここと笑つてゐても笑ひの中に刀があつて、密かに人を殺した。隠れたこと、表に見えた

こと、微妙なこと、千變萬化すること、皆豫測できるけれども、分からないのは人と人との間で、笑ひが瞞りだつたりすることである。

(平成三十年四月九日受附)